

「ローカル」への思い



鎌田基予子教育委員長

平成27年12月16日に教育委員長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願い致します。

さて、「グローバル」という言葉を新聞記事で読み、大変関心を持っております。グローバルとは、「グローバル」と「ローカル」を合わせた造語で「地球規模の視野で考え、地域視点で行動する」という考え方です。これからの地域で活躍するグローバル人材の育成において、教育が担う役割は大きく、恵那市の教育が目指すところの「郷土愛」は、地域視点へとつながっていきます。また、恵那南地区中学校の統合問題を考えた時、この場合の「ローカル(地方の)」は、恵那市全市を「ローカル」と捉える広い郷土愛が必要となります。と、言うは簡単ですが、教える側の大人たち、そして住んでいる私たちも子どもたちと一緒に、その郷土愛を育まなければなりません。

引き続き、教育委員会へのご理解ご支援をよろしくお願い致します。

ニーズに応える教育環境作り



大畑雅幸教育長

正月2日に、3年に1度の高校の同窓会がありました。参加者は、毎回少しずつ少なくなっていますが、それでも80名程の仲間が集まり、若かりし頃を思い出し、話に花が咲きました。ちょうど息子や娘が結婚をし、中には孫ができた…という年代であるので、そんな事も話題になります。子ども達の多くは、実家を出て、恵那市よりは少し都会で所帯を持っているようで、誰しも寂しさと諦めの理由付けが言葉に出ます。「どうして戻って来ないのか？」と問題提起をし、還暦に近いおじさんとおばさん達の教育談義が始まりました。(中には本音は、若夫婦は田舎暮らしを煩わしい

と思っているかもしれませんし、嫁姑の関係が理由かもしれませんが…)息子や娘の言い分は、「仕事の都合」と「子どもの教育」のことが主たる理由のようです。特に中学生、高校生の時期の教育は、“街に近い所”に住んでいた方が何かと便利だということで、要素の筆頭に“塾がある”、2番に“駅が近い”が挙がるようです。自分の仕事先は、車の時代であるから多少のことはそれほど苦にはならない、時には単身赴任もあり、とのことですから、当市の特に山間地域の急激な少子化の理由は、先の理由に尽きるということになりました。「それならば、学校の校舎を使って塾がやれないか。教員OBに協力してもらえばいい。」「そこまで行かなくても、ネットで連携した塾もある。」「自分達の頃は、行きたい高校があれば下宿してでも行った。その高校に魅力があるかが決め手。」「都会の大学に行く前に、もっと学校で将来設計を教えた方がいい。」等々、一杯飲みながらの話ではありましたが、皆、私の仕事を承知しているので、熱く真面目に意見をしてくれます。仲間が大勢居るということは、有り難いものです。私にとっては、たいへん参考になり、元気がもらえる場となりました。児童生徒数の減少を嘆いているだけでは何も始まらないので、Uターンしてくれる息子夫婦、娘夫婦が一組でも増えるような教育と環境作りの施策を打ち出していきたいと思っております。ご賛同をお願いします。

市民に愛される図書館を目指す

*** 恵那市中央図書館 ***

中央図書館(伊藤文庫)では、「いつでも どこでも 本を」を目指して、読書推進の(核)として、子どもから高齢者まで全ての市民が生涯にわたって学び続けていくように「読書活動の推進」をすすめています。

子どもの読書環境を充実

子どもの頃からの読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かにするものであると言われています。

中央図書館では、乳幼児期から発達段階に合わせた読書を進める事業を行っています。生後7ヶ月の「ブックスタート事業」の次のステップとして、今年の8月に、幼児期の子どもたち(約1,200名)へ「えほんの思い出」という読書手帳を配付し、大人になったとき「親子でこんな時間を過ごしたんだ」という思い出の冊子として使っていただくよう実施しています。手帳は70冊まで記入が出来ますが、2冊目の手帳希望者がすでに58名にのぼり、今も増加中です。



図書館サポーターの皆さんへ感謝

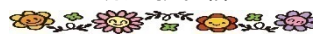
中央図書館を共に支えているのが、市民のサポーター(ボランティア)の皆さんです。イベントの開催、本の修理、生け花、お茶会等、日々図書館のため、利用者さんのために活動を行っていただいています。今後も、地域に根ざした図書館を目指して、サポーターの皆さんとの連携に努めていきます。



お花で癒やされます。

恵那市の幼児教育推進に向けて

*** 幼児教育課 ***



夢中にさせる・遊びにひたらせる援助



子どもの自立心を育む上で、遊びを心ゆくまで楽しむことが大切です。

明智こども園の5歳児の英語あそびでは、ALTのジェスチャーを交えた話に、元気よく反応する園児の声飛び交っていました。運動あそびでは、かえるになりきって大きく跳ぶ動きを、保育教諭と仲間と一緒に何度も繰り返していました。3歳児では、自分で折り紙を使ってトンボを作り終わると、トンボを飛ばせようと自分もトンボになって遊戯室を走りまわりました。保育教諭が「トンボが止まったよ」と言うと、ぴたっと体の動きを止め、作ったトンボも動かないように、じっと静止させるのを楽しんでいました。遊びに夢中になる姿を引き出すためには、保育教諭の援助と環境づくりの工夫が不可欠です。夢中になる、みんなと一緒に楽しみながら遊びこむ活動が、充実感や達成感を生み、それがやがて、主体性や社会性につながると感じました。

～園訪問だより NO.29より～

恵那市は、平成27年度より、旧幼稚園と旧保育園の公立16園がこども園に移行しました。恵那市の教育が目指す「主体性・社会性・郷土愛」を育むために、教育委員会訪問、保育参観研究会、各研修会に加え、日々の園訪問を通して、質の高い幼児教育の推進に向けた取り組みの充実を図っています。